

# 『日本語書記史原論』

小松 英雄 著

本書にいう「書記」とは、文字で書かれた記録を意味する writing の訳語である。すべての書記は情報の蓄蔵であり (All writing is information storage.)、言語の記録を目的としないという立場 (A. Gaur, 1984) が、本書の立脚する基本理念である。

日本語に基づく書記テキストに関しては、事実上、未開発の領域であるから、研究の原点をどこに置くべきか、また、研究の方法がどのようなべきかについての基礎的な問題提起という意味で原論と命名した。

書記の自律性を確認したうえで、日本語史研究の資料として書記テキストを扱った実践例をいくつか提示した。

古代漢字文化圏の一員に組み込まれた日本において、漢字を素材にして、日本語に基づく書記が発達した経緯をたどり、漢字文／仮名文／片仮名文が、それぞれ、記録の手段としてどのような機能を分担してきたかを解明しようと試みた。

以下に各章の要約を示す。

総説 日本語書記史と日本語史研究

表音文字は語の綴りを形成することによって機能を発揮し、語の綴り

は書記テキストに組み込まれることによって機能を発揮する。表語文字についても原理は共通である。書記の目的は情報を蓄蔵することであり、言語は情報を蓄蔵する媒体である。書記テキストに反映された言語は歪んだ鏡像であるから、鏡像を適切に補正しなければ言語資料にならない。補正のためには、それぞれのテキストが作成された目的を見極める必要がある。

以上の趣旨を実例に基づいて提示する。既知の事実新しい解釈を加える。

## 第一章 仮名文の発達

平安時代になると、③事柄の公式な記録に漢字文、④日常的な事柄の非公式な記録に片仮名文、⑤美的内容の表出に仮名文という三つの書記様式が三位一体で機能するようになった。本章では、そのような機能分担が成立した経緯について考察する。

## 第二章 仮名文テキストの用字原理

次章のための予備的考察。主として、青谿書屋本『土左日記』のテキストにおける漢字／仮名の遣い分けの原理を、個別例の検討をつうじて解明する。

## 第三章 藤原定家の文字遣

前章を承ける。仮名文学作品の定家自筆証本テキストは、写し継がれることを前提にして整定されたものであり、漢字／仮名の遣い分けや、

基本字体／補助字体の遣い分けなど、誤解／誤読／誤写を生じないための工夫が隅々まで徹底していることを指摘する。

#### 第四章 定家仮名遣の軌跡

前章を承ける。藤原定家は証本テキストを整定するために独自の文字遣を定めて実行したが、仮名の綴りに関しては、社会慣習として固定していた綴りを優先して採用している。定家仮名遣とよばれた行阿の『仮名文字遣』は、『下官集』の「嫌文字事」の条項を大幅に増補したものであるが、遣い分けるべき仮名の種類を四十七種に限定し、仮名正書法の規範となることを意図したものであるから、同書を仮名遣の嚆矢と認めるべきである。

#### 第五章 きしかた考

古典文法では、回想の助動詞キが力変動詞の未然形に後接するとされているが、平安中期の仮名文学作品には「こしかた」が少なく、「きしかた」が多用されている。「こしかた」はへ地点を指し、「きしかた」はへ過去を指すという指摘があるが、それに対して、「きしかた」はキニシカタに音便を生じたキンジカタを表わしているという解釈が提出された。本章では、書記テキストを言語資料として扱う場合の基本的な方法の誤りを指摘して、その論考を全面的に否定し、新たな解釈を提示する。

コシカタ／キシカタは、意味の分化に応じて形成された名詞のダブルットであり、接統関係を記述する対象から除外される。

#### 第六章 日本語書記史からみた法隆寺金堂薬師仏造像銘

総説に提示した方法の実践例。表題に示した銘文のテキストを解析の対象とする。この銘文は、事実上、敬語史の最古の資料として重視されてきたが、短絡的に言語資料とみなされて恣意的に解釈されたために、日本語の敬語史は出発点を誤ることになった。本章では、尊敬語／謙讓語の一次的機能がグレガ／グレニの関係表示にあることを明らかにし、敬語史に新たな観点を導入する。また、語句の配列順序や文字の大きさにすべて意味があることをも指摘する。

#### 第七章 書記テキストの包括的解析

総説に提示した方法の実践例。『讃岐国司解端書』は草仮名文献として知られており、楷書体の借字から極草体の仮名が発達する過渡的段階の草仮名であるとか、男子の草仮名であるとか説明されてきた。また、音便形の使用や助詞ナモの使用など、断片的な事実が指摘されてきた。本章の趣旨は、つぎの二項に要約される。①書記はコヘレント(Cohesive)なテキストとして包括的に解析すべきである。②書記テキストは、書く立場よりも読む立場を、より重視して解析すべきである。

#### 第八章 句字考

漢和字典で国字とされている「句」字は、文字構成の原理が不透明である。本章では、この文字が形成されてから現在に至る経緯について、以下の帰結を導く。①類義語のニホフ／カホル（カヲル）が共通の漢字と結び付き、書き分け／読み分けができない状態が生じたために、

「韻」字から聴覚要因を除いた「勻」字を形成してニホフに当て、また、意味の類似と微妙な相違とを象徴した「勻」字を形成してカホルに当ることによつて混乱が解消された。⑤雅語のカホルが中国の漢字との結び付きを求めたことによつて「勻」字が使用されなくなり、それまで「勻」字で表わされていたニホフに、それが当てられるようになった。

小松 英雄著『日本語書記史原論』

笠間書院刊（一九九八年五月）

A5判 三七八頁

六、八〇〇円